



TITLE:

家族型農場の理論 - 西ドイツにおける農業構造改善政策と関連して -

AUTHOR(S):

山岡, 亮一

---

CITATION:

山岡, 亮一. 家族型農場の理論 - 西ドイツにおける農業構造改善政策と関連して -. 経済論叢 1961, 87(6): 421-438

ISSUE DATE:

1961-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132827>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十七卷 第六號

---

家族型農場の理論……………山岡亮一 1

C. I. F. 価格の巨視分析 (二) ……………佐波宣平 19

ブルック・ファーム……………穂積文雄 30

プロイセン絶対主義の鉱業政策と  
オーベル・シユレージエン鉱山業  
……………肥前栄一 52

---

昭和三十六年六月

京都大學經濟學會

# 家族型農場の理論

——西ドイツにおける農業構造改善政策と関連して——

山岡 亮 一

(一)

わたくしは昨年十二月の本誌上において、戦後における西ドイツの農業構造についてのべ、中農層肥大の現象がそこで見られることを指摘した。そしてこの現象を、現在西ドイツ農業の生産力発展段階が、工業部門における概念をあてはめていえば、マニュファクチュア段階から工場制段階への転換の端緒に位置し、より具体的には、トラクター化による機械化の過程がほぼおわりに近づき、コンバイン導入の発端に達しながらも、これが容易にひろがり得ない段階、即ち機械化の第一過程から第二過程への過渡期の現象としてとらえた。この第二過程突入のコースがどのような形態でひらかれるかは、現在迄のコンバイン導入の経営主体が、雇用労働力による企業型経営と、家族型農民経営とにわかれたれ、後者においては共有又は協同組合所有のコンバインを共同で利用することによって生産の共同化に一步をふみ出すという統計数値にあらわれた事実がまことに示唆的である。このことは大生産手段コンバインの導入が、資本主義的農企業の造出によるか、或は共同利用による漸次的な生産過程の共同化によるか、

(勿論これはそのままホルホーズ化を意味するものではない)のこととなった経路の存在することをあらわしている。中農層肥大の現象をこのように生産力発展の、従って技術水準の、限界を示す一つの過渡的な現象としてとらえる立場にたてば、この中農層は決して強靱にして安定的なものとして把握することは出来ない。それはたえず上下に分解する契機をその中に含んだものと考えられる。同時にそれ自体としては、過去にくらべて、資本の有機的構成の高度化という点で、農業の社会化過程はつらぬかれていく。かつてマルクスによつて分割地農民の典型と見られた西ドイツの農民は、イギリスにおける如く企業型小作農民「ファーマー」に取つかわられることなく、独占資本の下で、その姿態を対応的に中農にゆがめながら、機械化の第一過程をまがりなりにもとりぬけつつあることは、農業の資本主義発展に見られる不格一性を示すものというよりは、むしろ、農業における資本主義化の工業に對比しての著しい立おくれを物語るものといわざるを得ない。

## (二)

上述したような西ドイツ農業の現実に見られる動向について、その国の農業経済学者がどのような受けとめ方をし、又これをどのように理論化しているかは誠に興味ある問題といわねばならない。又西ドイツ政府が強力に「農業構造改善政策」を打出したのであるから、これを基礎づけるにたる理論が存在するものと考えられる。しかしながら、わたくしが西ドイツ滞在中見出したドイツ農業経済学は歴史学派の流れをくむ所謂農業政策学派のそれであり、理論なき叙述の積み重ねにおわっているのが現状で、僅かに一九五八年一月西ドイツの首都ボンの近郊、バー・ゴードスベルクにおいて行われた社会的市場経済推進協議会第十回大会において、ギーセン大学の教授であ

り、フランクフルト・アム・マインにある農民的家族經濟研究所長 (Leiter der Forschungsstelle für bäuerliche Familienwirtschaft, Frankfurt/M.) を兼任するヘルマン・プリーベ (Hermann Priebe) の講演「構造發展の可能性と限界」、Möglichkeiten und Grenzen der Strukturentwicklung」の中に、「農業構造改善政策」の基盤となる基本理論を見出すにとどまった。このプリーベの理論については、この講演の終ったあとで行われた討論に際して、その大会に出席した当時の農務大臣リュッケ氏が、自分はプリーベ教授ののべた基本原理に人々が全面的に同意するものと信じる。いとしき妻よ、少しあらわれ方がおそすぎた位だ。とのべ、プリーベの打立てた基本原理に心からの賛意を表すると共に、この基本理論が「農業構造改善政策」発足当初にあらわれなかったことを残念がっている。

ともあれここで現在西ドイツの農業發展の動向を背景としてあらわれた農業經濟理論を代表するものとして、プリーベ教授の所説の諸特徴をとりだし、その輪廓をえがいておきたい。

### (一)

プリーベは農業構造の發展の方向に二つのちがった型のあることを指摘する。その一つは生物的成長の類型であり、従つてそれは漸進的ともいふべき發展のコースである。他は革命的變革の類型であり、従つてそこでは變革は飛躍的な發展のコースを迎る。彼の常に念頭においているのは、戦後分裂した東ドイツと西ドイツ、この両者の農業の發展過程に見られる異質性である。東ドイツ農業における革命の變革の結果として生れたコルホーズによる發展と、西ドイツに見られる自立的家族型農場による發展との二つの方式の比較考量がその基礎によつてわっている。

彼の理論が西ドイツにおける自立的家族型農場による発展を基盤として出て来たことはいうまでもない。まずはじめに彼は構造発展の問題を、その課題の内実とその範囲に則して、次の如く定義づけている。曰く、「われわれは構造発展の概念を余りにせまくとらえてはならない。それは要するに、経営の総体的な変化、並びに農業の生産関係における総体的な変化とみなさねばならぬ」と。(Hermann Priebe, *Möglichkeiten und Grenzen der Strukturentwicklung, in „Hilfe zur Selbsthilfe für die Landwirtschaft.“* 1958, S. 14) このような変化が現在西ドイツに見られる、昨年十二月号で指摘した、技術的経済的或は社会的な発展の影響に伴って生れるものであることはいうまでもない。今日西ドイツ農業は広汎な変化の過程にあるが、その変化の中に、「将来の農業経営形態を判断する上で、確固たる基礎をとらえ得るような二、三のよりどころが存在する」(a. a. O. S. 17)という。ここでかつてカウツキーと大経営小経営優越論をたたかわせたエドアルド・ダビッド (Vgl. E. David, „Sozialismus u. Landwirtschaft“ 1905.) の「農業有機的生産論」と極めて近い理論が展開される。即ち人間がより高度の食料生産、たとえば食料の合成的生産に完全に移ってしまわぬかぎり、農業生産のかわることなき基本的前提はこのらざるを得ない。従って生産行程を荷う生物(動物・植物)自体が前提として考えられ、今日も依然として土地と気候に依存する点では変わることはない。言葉の本来の意味での „Industrialisierung“ は農業においては不可能であって、たとえば工場で行われるように、農業では、労働過程と生産過程は場所的に集中することも出来なければ、連続して行うことも出来ない。最も完全な農業機械の使用も生物に依存し、即ちその生命のリズムに従わざるを得ない。このような農業生産の基本的前提をふまえた上で、ブリーベは西ドイツ農業にかせられた課題を次の如く設定する。「生物学的、技術的並びに社会的発展の必ずしも完全に同一の方向をとらない傾向及び諸力を特定の経営

形態においてどのように総合するかという点こそが問題である。しかもその際経済的に有利性のある生産、更に長年月にわたる生産性の保持を目的とすると共に、現代の社会的な考え方に基づいた労働形態と、生活様式とをつくり出す必要がある」と。(a. a. O. S. 18) 上述の諸要請に答えるものとして、彼は多年研究の結果である「農民型の高度に機械化された輪裁式経営」„Der hochmechanisierte Fruchtwechselwirtschaft bäuerlicher Prägung“を提示する。曰く、「この経営形態はわたしの考えでは、農業の現在迄の発展における一つの最高の形態といつてよい」。(a. a. O. S. 16) プリーベによれば、この農民型の高度に機械化された輪裁式経営であれば、技術的並びに生物学的な発展力の外見上の矛盾が最もよく調整され、種々の耕種部門と加工部門の組合せの中に土地の肥沃度が確保され、人間の労働力とモーターによる索引力とが、労働要求を時間的に調整し合う多くの利用部門の組み入れによって、一年の最大の部分を生産的に利用出来ることとなる。この経営形態においては、生産性を永続的にくみ出すよう努め、従って掠奪耕作による一時的な利得を断念する場合には、ヘクタール当り並びに労働力当り相対的に最高の生産性が得られるという。アメリカでしばしば叫ばれる土地保全の問題に対しては、「農民型の輪裁式経営の中にこそ、一つの模範的解答が見出されることをわれわれはもともと自覚せねばならぬ」(a. a. O. S. 18)という。このように自らその意義を高く評価することの中に、東ヨーロッパ的共同経営に對抗しようとする彼の意欲が明かに見出される。この経営形態においては農民型の労働制度をより広義にとらえ、いわばおし広げられた家族労働経済の範囲に属するものと考えている。従って副次的な意味における雇傭労働はその中に含まれているものといわねばならない。彼の理論によれば、高度に発達した農業とは、アメリカ式大工場の農場経営でもなく、又ソビエット型のコルホーズ、ソフオーズ経営でもない。小企業経済の形態こそこれに基づいたものなのである。こ

のような経営においては、経営主体としての人間如何が経営の成果を決定する要因として過去と比較してその重要性をますことは当然である。即ち最大の経営結果は今日高い教養と責任感にみちた人間によつてのみもたらされる。

以上の叙述によつて、西ドイツ今日の農業担当者としての理想像が「農民型の高度に機械化された輪裁式経営」に外ならぬという彼の主張の骨ぐみは明かとなつたであろう。理想像の設定を了つて、彼は西ドイツ農業政策の最大目標である農業構造改善の問題に入つて行く。この重要問題に入る前に、わたくしは、農業における経営規模の大小に関する彼の根本的な考え方に簡単にふれておこう。今日一般に最もめぐまれた生産諸条件に関する問題をしばしば経営規模の大小にのみかかわるものと考えている。プリーベによれば、土地の経営規模は、それが、生産要素として不十分な場合、即ち労働力の或は家族の最小単位を完全に利用しつくし得ない時にのみ、決定的役割を演ずる。或は逆に、家族の最小単位が既存の土地面積上でその労働力を投下するには余りにも小さすぎる時、従つて労働投下量が粗放にすぎて、収益性の低い経営の場合、たとえば農民の大経営でよく見られるが、この場合にのみ、経営規模が問題となる。要するに経営規模の大小については、家族型経営と比較的大経営との間では、労働生産性の上に本質的な差異は存在しないと彼は考えている。西ドイツ政府の「農業白書」„Grüner Bericht“を見れば、経営規模の差は、耕作地域や経営方式のちがい程には、統計数値の比較の上で大きなひらきは無い。耕作地域を同じくする経営の場合には、大体一〇%の差があらわれる程度のものである。これに対して、経営規模を等しくしても、経営方式を異にし、耕作地域をことにすると、その差は一〇〇%に及ぶことさえある。プリーベはこの中に、一般的生産諸条件及び農業における生産性に対する構成上の欠陥は経営規模の大小よりも決定的であることによりどこを見出している。



さて彼の農業構造改善についての考え方はどうか。そのいうところはこうである。「構造改善の目標は、次の二側面について考察されねばならない。第一には農業内部における不均衡を減少せしめるものとして、第二には経済全体の中での農業の立場の改善を生み出すものとしてである」と。(p. 60, 61) 次に、農業内部における不均衡を縮小しようという課題について彼のとくところを簡単に要約しよう。この課題の解決は、一言でいえば、生産諸条件の広汎にわたる改善による外はない。個々の点については、第一に耕地の新たな調整。西ドイツで尚今後全耕地面積中六〇〇万ヘクタールから七〇〇万ヘクタールにのぼるものと推定されている耕地面積は、耕地並びに牧草地の分散や、農道網の不足、農舎から圃場への距離の遠さ等によって、あらゆる有意義な生産力発展を阻止されている。新技術の導入を阻むものは、今日の状態の下では、経営規模の大小というよりは、むしろ耕圃の細分を伴った村落の境界地である。古い農場建物、狹隘な農舎の前庭は作業上の困難をひきおこし、広大な地域において今日尚土地改良を必要とする。このことは水利規制との関連において特に要求されている。これらの実施をまわって、耕地ははじめてその自然的前提にふさわしい利用が可能となり、それに相当する収益が得られる。従って各種の改良方策の社会的、経済的効果は著しく大きなものである。経営は現在の経営上、技術上の発展状況に適應するだけの前提条件をそなえている。すべての新たな可能性を利用しつくすことによって労働生産力の著しい増大がうまれて来る。労働需要が減少すると同時に、生産力は高まり、この両者が相まって、一労働力当りの純生産を二倍、三倍に引上げることとなる。旧い状態に比較して、最大の利益があげられるのは、経営のすべての部門で新しい形態を可能ならしめる入植経営(Neusiedlung)の場合である。改良諸方策が広汎にわたるほど、すべての利用手段の效果的利用度は一般に愈々大きくなる。

経営規模に見られる発展の方向は一定の類型に集中する傾向を示すとブリーベは述べている。(Vgl. a. a. O. S. 22) 即ち自然に行われている経営規模の変化は、関係者は気づかずとも、いたるところで進行中であるという。過去五年間に二ヘクタールから五ヘクタールまでの経営規模層は約一〇%だけ減少している。農民は兼業農家の場合、より小さな経営規模へと後退し、専業農家の場合には、経営を若干拡大しようと努めている。大農経営に至らぬ中間層においても同様の現象が見られる。農家家族によつて過重負担なしに経営の可能な一定の大きさへの経営規模の縮小か、或いは逆に内部的統合、換言すれば、今迄粗放であつた経営の集約化によるか、経営面積の拡張によるかは別として、専門労働者に消化可能な経営規模まで経済能力をおし広げるという現象である。上述の変化については、家族型経営が農業構造の中核として一層強力に形成される。経営規模は言うまでもなく形式的にはきまらない。この問題はまさに立地条件を異にするに従つて、その大きさは適当に変化する。その最小規模は、普通世代からなる二人ばかりの成人労働を想定することの出来る家族の生活諸要求によつて規定されている。かくて年間一五〇〇〇ドイツ・マルクの粗収益がこれらにかなう所得額とみなされている。経営規模の上限は家族の能力による規定をうける。以前のように独身者の補助労働力が容易に得られないからである。技術の進歩によつて、この上限はおそらくおしひろげられようが、この可能性はブリーベによれば、余りに高く評価してはならないと見ている。即ち技術のはたす任務は、労働をより容易ならしめ、農民の労働日をより短縮することにあるからである。(a. a. O. S. 24)

生活諸関係の均等化とは単に所得の問題であるのみならず、農民がその所得と引かえに白ら行わねばならない労働の問題である。このようにして経営規模自身の中に、のぞましい所得と、負担にたえられる程度の労働苦痛度との間の一種の均衡状態がつくり出されねばならない。ここから「われわれは経営規模をますます拡大することによ

つて、一般に生産力を増大させたいという願いは、全く見とおしのない努力であることを認識しなければならぬ」というブリーベの観点が引出されてくる。(Vgl. a. a. O. S. 24) このような論理によって、彼は自然必然的に生れて来る家族の純化傾向に見合うところの家族経営を中核として想定し、ここから経営規模の上限と下限とを説明している。この上限下限の導出には、チャヤノフの「小農経済理論」に見られる農家家族の生活欲望度と労働苦痛度との均衡の考え方が、利用されているけれども、家族経営のおかれた客観的な環境を、チャヤノフ流に純粹培養による自給自足経済の段階においてとらえることなく、むしろその反対に完全な商品経済社会として考えていることはいうまでもない。従つて又その家族の生活欲望といつても、アウタルキーの中の最低限の生活欲望ではなくて、他の産業部門に働く人々、即ち都市に生活する人々の生活と比較した上でのそれであることを忘れてはならない。労働苦痛度といつても質的に向上した精神的並びに肉体的労働を思い浮べる必要がある。

このような観点に立つブリーベは、農業構造改善の内部的な目標、即ち農業部門内部のあらゆる格差は、改善諸方策によつて縮小乃至は消滅せしめ得るという確信をもち、この方向への努力は経営規模拡大に対して払うよりは、一定の経営規模の下での合理化施策に重点をおくべきだと考えている。農業部門内部の格差縮小の問題には上にのべたように農業改善政策によりその目的を達し得るとの見透しをもつブリーベも、農業と他の産業との関係については著しく悲観的である。曰く、「農業と他の経済との関係においては、農業構造改善の作用する限界が明確に認識されねばならぬ」と。(Vgl. a. a. O. S. 26) この点は現在わが国で論議されている農業構造改善政策が、あたかも農業と農業以外の他の産業との所得格差を縮小せしめ、時には消滅せしめうるいわば万能薬視されているのと比較して、示唆するところ大であらう。彼ののべるところをしばらくきこう。「農業の他の経済に対する生産力のひ

らきは、経営規模を一層拡大することによってなくなることが出来るという期待にしばしば出くわす。今日二人の労働力で、一五ヘクタールを耕作し得たとして、明日は二〇ヘクタール、更にその次の日には三〇―三五ヘクタールを経営することが可能であるようにいわれている。ここでは土地が絶対的に同一の収益を生み出すであらうという静態的な考え方が問題である。だがすべての収益は経営方式に依存し、又経営方式は存在する労働力に依存している。僅かの労働力による大きな面積の粗放な経営は一定の限界に達すると経済的には全く収益を生まなくなる」と。(同上)土地の掠奪耕作によって、大面積の粗放経営が二三年はうまくやれるという例外はひとめられても、このような方策は、経済的には一般に全く意義は持たないのであると考える。上述せる観点から生れる西ドイツ農業構造の将来への見透しは次の如くである。「われわれは農業における経営規模の発展についての広く見られる誤りの原因を明かならしめる必要がある。この誤った考えの生れる源泉はかつてオストエルベの農業に見られた大経営イデオロギーであり、今日常に工業型の農業の発展という思想にみちびくのである。そこではただ単に技術のみが考えられ、生物学的並びに社会的見地に立つことが少く、この経営規模の考え方には、その基礎をホルホーズや農村都市(Agrorstadt)の建設のために東欧で役立ったと同じ議論が用いられている。経営規模をひろげたいという農民の一部に見られる強い願望にはおそらくは過去の遺物としての社会的指導観念が働いているように思われる。即ち人間の社会的優越は所有によって規定されるもので、今日の社会にふさわしい働きによりきまるものではないという考え方である。その一部は昔の思想の残滓が今もさまよっているもので、所謂第三帝国で幅をきかしたところの大面積をようする農民紳士(Herrnenbauern)の市民封建的な思想に由来するものであらう。わたくしは以上のことをはっきりとのべておきたい。われわれがどのようなことを避けねばならぬかを自覚するためである。又将来の

ために、この問題を冷静にしかも客観的に見るのがどうしても必要だとわたくしは考えている」と。(同上)要するに、余りにも大きな家族型経営は農民とその家族とにたえざる労働過重をもたらし、農民には大きな危険を意味する。元来大経営が生れる所以は必ずしも経済的根拠が決定的ではなく、従って経営の拡大が大経営の収益性を証明することにならないのは、あたかも、農地分割相続による経営の縮小が細分化された小経営の収益性を証明するものでないのと同様で、両者ともに結局は農業における多くの事象が単に経済的にのみ解明されてはならない証拠であるというのがブリーベの根本的な立場といえよう。

アメリカ合衆国における大工場制的農業の発展は、ブリーベの目には特定の条件に見られる特別の現象のようにうつっている。「アメリカ合衆国における発展もわたくしにとっては殆んど証明力をもつものではない。むしろわが国には同様のことがおこらないよう注意を払う必要がある」(A. & O. S. 28)という。即ち、経営経済的な諸事情は、アメリカでは穀物価格補償によってゆがめられている。この数年間比較的大面積での穀物単作は財政上の利益を享受して来た。そこで惹起された過剰生産の結果として、有名な農政上の諸方策が実施され、耕地を買い占めこれを耕作せずにねかせておくというのが、一つの職業に化するという有様になった。掠奪耕作をこととし、休閒地がふえ、農村地帯の人口減少を生来すること、以上がアメリカ農業に見られる特徴である。この勢のおもむくところ、必然的に堤防の決潰ともいふべき現象がおこる。人口の不足によって、学校、教会等の文化的諸施設を維持することが困難となり、若者達には人間関係に不満足な状態を呈し、とどのつまり、若い人口の流出、従って、人間の住まぬ地域にかわる。ここまで来れば、彼の考える理想型経営形態への復帰はまことにむづかしい。このような危険をあらかじめ察知し、農業構造総体に好ましからざる結果をもたらすような経営規模の発展方向を辿らぬよう十分

の注意を払わねばならないのであって、今日緊急必要なことは構造発展における可能性の限界を見定め、どのような誤りにもおちいらぬよう対処することである。プリーベの言わんとするところを要約すれば、構造改善はなるほど農業部門内部における不均等を縮小し、更にいうまでもなく、諸外国の農業に対する西ドイツの農業の競争力を高めるための手段ではある。併しながら、他の経済諸部門に対する農業の生産力発展の格差を農業構造の変化により完全にとりのぞくことは不可能である、ということになる。(Vgl. a. a. O. S. 24) 従って、経済全体の中での相異なる生産力発展を正しく調整するという課題は、経営規模にかかわる問題ではなくて、もっぱら経済政策全般にわたる話方策による外はない。

プリーベは西ドイツの農業における理想像が、これは同時に世界各国の農業にも普遍的に妥当するものと考えているのであるが、上述せる「農民型の高度に機械化された輪裁式経営」であることを確信しているけれども、同時に彼は、今日の発展段階において、自国の農業構造について、厳密な将来図を描き出すことが事実上不可能であることも理解してはいる。従って彼は「われわれはあらゆる計画の樹立に行きすぎた完全性を意図しないように注意せねばならないし、将来の発展については余裕をもたす必要がある」(同上)と極めて慎重なまなまを見せている。

## (四)

次に農業構造政策の具体的な問題について彼の語るところを摘記しよう。

最も深い関心を払っているのは、いうまでもなく総計八〇万の専業農家である。その大多数は比較的大きな改善施策が必要であると見て差支えはない。ほぼ五〇万の農民的経営はその生産基盤のかなり徹底した改変によりはじ

めて健全な経営に発展することが出来る。現在の状態のままでは、経済上、価格政策上の援助はすべて十分な効果をあげるとは考えられぬ。耕地整理、道路建設、水利関係の規制等の問題の外に、農業政策の最も重要な将来の課題と考えられる機械化並びに建物の近代化に対してだけでも大きな投資計画が必要である。差しせまって必要な課題をこの一五—二〇年間に達成することに成功せねばならぬものとすれば、西ドイツ農業においては年々三万戸にのぼる新築が必要となる。長い戦争期間、又戦後期間、更に戦前にも軍備のために、建物の近代化は何十年の間おさえられて来た。隣接国デンマーク、オランダとくらべると、西ドイツのおくれを取り戻したいという願いは特にきわだつて認められる。農場建物は今日経営の労働経済上及び技術上の改造のための最重要なスプリング・ボードの一つであると見られる。上記の新建築に要する資金はさし当つて莫大なものであろう。数字を概算して見ると、三万戸の建築数の一部については農舎全体の新築、他の部分については旧建物の改造、そしてこの両者に一戸につき五万ドイツ・マルクをあてるものとすれば、年々の資金需要は一五億ドイツ・マルク（約一三五〇億円）に達する。それと別に農業部門において年々建物のために支出している資金額は一〇億ドイツ・マルクである。その中当座の修理のための所要額を差し引くと、年々七億から八億ドイツ・マルクを附加的に金融せねばならなくなる。併しこれらの金額は夢物語ではなくて、グリニューナ・プランの中に組み込まれた金額の枠内におさめられたものである。

今後十年間に農業を完全に機械化するためには、年々一〇億ドイツ・マルクの追加的投資が必要である。現在年々農業における機械並びにトラクターの購入資金として一五億ドイツ・マルクが調達されている。その中でどれだけの部分が自己調達資金でまかなわれているかは明かではない。だが農業が自己調達の形でまかになった資金の最大

部分を機械化にあてたことははっきりしている。いうまでもなく、経営の収益状態の如何によつて、このようなことが可能であるかどうかがきまるわけであるが、全般的にいえば、自己調達の際の形のみでは、経営の完全な近代化はあり得ない。ともあれ、西ドイツ農業の今後一五—二〇年間における全面的近代化を目標とする投資計画は、可能性を十分にそなえたものと考えられる。それは内容をもつ実現可能な目標をねらう方策であることには相違なく、このような計画のために支出される国家資金については、現実採算に合う能力をもつものと考えられる。たとえば、この方策によれば、西ドイツ農業の諸外国に対する競争力を高めるに役立つであろうし、又国内市場において、農業以外の経済に対しても有利な作用をもたらすことであろう。更に、かりに若し輸出が幾分か減退し、社会的な住宅建設量が減少するものとすれば、一層上述の投資計画が歓迎をうける結果となることだろう。

このようにプリーベは、構造発展の問題をただ単に個々の農業経営改善の側面からのみ見ることなく、西ドイツ農業の全体構造、更に農業以外の経済全般に亘つて、その生産性について観察している。

次に農業に必然的に附随する問題、生産力の増加が所期の成果をあげた場合に生ずる、所謂過剰生産の矛盾がとりあげられる。即ち人口増大と購買力増進にもとづいて今後も考えられる食料消費の伸張可能性はある程度限られている。構造改善により各個々の経営に生産量の著しい増大がもたらされることはたしかであり、又各個別経営にとっては、勿論このことが到達すべき目標でもあるわけだ。この増大の程度がどれ程になるかは明かではない。一地方の調査によれば、耕地整理後の純粋の食料生産の高まりは、約五〇%、入植経営の場合、六〇—七五%に上っている。実におどろくべき数字といえる。かくて過剰生産の危険は誰の目にも明かであり、西ドイツ農業の構造的欠陥が取り去られること、早ければ早いだけ、この危険は愈々大となる。プリーベはこの危険を痛切に感じている。



彼のこの危機に対する対策は如何。一言にいうならば最も劣悪な条件の農業経営切捨て、即ち貧農の農業外への脱落促進である。

曰く、「併し一方では反対の傾向が生じる。劣悪な立地諸条件は生産性の上に一定の發展限度を来さざるを得ない。極端に劣悪な土地並びに気象の状態の下で、その地形上の諸困難がこれに加わると、そこで行われる農業経営は、一般の所得水準からのひらきが一層大きくなる。標準費用を支出した上で、ヘクタール当りの粗収益が一定限度を超え得ない時、その経営の労働生産性は余りにも低きにすぎた。経験の教えるところでは、その限界は今日一ヘクタール当り八〇〇ドイツ・マルクの粗収益の線で劃されている。これ以下の粗収益ならば、収益性は〇といえよう。人によつては一〇〇〇ドイツ・マルクから一二〇〇ドイツ・マルクの線さえ主張している。畜産についても同様のことがいえる。乳牛飼育の場合、一年間の搾乳量三〇〇〇—四〇〇〇リットルでは何等の収益もあげ得ない。従つて專業農家をとれば、劣悪な限界農家が脱落して行くという傾向に対しては、おそらく手のほどしやうがない」。このように考えれば、過剰生産増大の危険に対処して、限界耕地の放棄によつて、経営上から一定の調整がなされうることとなる。(Vgl. a. a. O. S. 26)

このようにして、農業構造發展の問題は、農業政策をはるかにこえた課題に直面する。即ち限界農業経営の主体を農業から切りはなして、農業以外の他の職業へ移植すること、しかもこれを能うかぎり少ない摩擦で、たやすく行ふことが問題となる。その際彼等の希望によつては、小経営の完全解消によらず、彼等に小地片 (Kleinstellen) を残して、零細な副業経営を続けさせる配慮も同時に必要であらう。これはもはや農業政策の課題ではない。一連の諸方策、たとえば、交通計画、地域開発、労働投下地域の地方分散その他、を伴う有意義な地方的經濟政策に外

ならない。若しかりに、農業めぐまれず、しかも工業面でも交通面でも共に尚未発達の地方において、上述の課題を近き将来解決することが不成功に了つたとすれば、西ドイツの多くの地方で、現在の人口密度を維持することは困難となり、間もなく若者たちは村を去り、フランスで今日見られると同様の人口稀薄な地方が出現する結果となることであろう。(Vgl. a. a. O. S. 27)

経済政策全般にわたつての余りにも抽象的すぎる以上の提案と別に、かなり具体的な叙述がそのあとに続いている。その表現がかなり漠然としてつかみにくい点が見られるとはいへ、プリーベの独自の考え方がそこにあらわれている。曰く、「将来かなりの地方で、副業の形態のみ、農民、及び園芸家に活動の余地を提供するであろう事実は、わたくしにとっては少しもいとうべきことではない。西ドイツの專業的農村人口は今日の生産関係の下で、本来少数であつてしかるべきものだ。だから、国民の大きな部分が、専業農家でない他のあり方で、農村生活からの利益を享受しうるものとすれば、喜ぶべきことであり、この場合更に国民の大きな層を財産所有者たらしめるというめぐまれた可能性も存在する。より広汎な国民層を財産所有者たらしめようと努める連邦政府の現在とつては意図にもかかわらず、上述の問題にふれていないのは、わたくしには理解出来ない。株式証券等のような、いわばプラトニックな形態での財産所有で人間は一体十分に満足出来るものだろうか。自己所有の家屋や土地の形で具体的に財産を所有することと、株券の形で所有することとのちがいをもつとはつきりとつかむ必要がある」と。(同上)彼の期待するところは都市人口の農村における財産取得、市民的土地所有の奨励のように受けとれる。現在既に零細経営を以て特徴づけられているヴェルテンベルク州に顕著にあらわれている高率小作料の問題が、プリーベの提言の実施されたあかつきには、全西ドイツに普遍化するおそれさえ感ずる。併し彼にはそのような配慮は

いささかも見られず、「具体的形態での財産所有の分散は、西ドイツの経済政策及び社会政策に、東欧諸国の努力と対比して、いずれにせよ、積極的な利益を生み出すことだろう。又わたくしは、次のようにも考える、上にのべた仕方でも多くの人間に、農村の小地片をよりどころとして、あたえるところの職業の二重性は、多くの地方における特殊専門化がもたらす悪結果と、増大する文明病に対して、好ましい影響をあたえることが出来よう。現代の経済的並びに技術的發展は、すべての人間を緊張とあわただしさにおとし入れている。その結果人間は愈々静止的なものを必要とし、あらゆる市場価値を超越した領域を欲している。……このように考えて来れば、われわれの問題も、人間性の發展と、自己責任の余地を保持することの可能性とを、人間にあたえうるような新しい一つの社会構造を創造するというわれわれの時代の大問題と結びついて来る」と(Vgl. a. a. O. S. 35)のべて、東欧諸国、就中東ドイツに対比しての西ドイツ将来の社会構造に見らるべき異質性を強調する。ここまで来ると、ドイツ人によく見られる説教者の口調が耳にひびいて、彼の理論の説得ではなくて、むしろおしつけの態度が色濃くあらわれるのである。

(四)

以上わたくしはブリーベのいわば家族型農場の理論の輪廓をのべ、その本質的性格の若干にふれて見た。最初にわたくしがのべたように決して安定的、固定的とはいえない中農を、ブリーベは彼のえがく理想像「高度に機械化された農民型の輪裁式経営」に著しく近づけて把え、或は将来において当然この理想像にまで成長可能のものと考えている。即ち、彼はこの理想化された中農の姿こそ世界の農業の到達すべき最高の目標とみているのであって、

そこまで来れば農業はそれ以上変化はないし、又変化させてはならぬものである。現在のところ、この理想型の農民、家族型農場が広汎に西ドイツ農業をおおっているわけではないことは、彼の叙述の中から見とられるのであるが、それにしてもわれわれは彼が著しく安定的に把えている中農の平均的な又外面的な究明で満足してはならない。中農の経営、経済の全般にわたる、更にはその家計内容にまで立入った分析、負債の量・質、生活形態と水準の検討が必要であることはいうまでもない。このような現在の中農層の内実にてらした性格づけについては機会を見てはたしたい。このことはブリーベの理論に対する最も鋭い批判となる筈である。